

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 24 日現在

機関番号：22604
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22700675
 研究課題名（和文） 地域在住高齢者のための「訪問型・閉じこもり予防プログラム」の開発
 研究課題名（英文） Development of 'home visiting program for preventing homebound' for elderly
 研究代表者 石橋 裕 (YU ISHIBASHI)
 首都大学東京・人間健康科学研究科・助教
 研究者番号：50458585

研究成果の概要（和文）：

本研究では、地域高齢者のための「訪問型・閉じこもり予防プログラム」の開発を目的として、調査研究と介入研究を実施した。調査研究では、高齢者の健康関連 QOL は閉じこもりよりも作業への認識の方がより強い影響を与えていることが明らかとなり、閉じこもりが必ずしも問題でないことが明らかとなった。介入研究(施設型)では、65 歳以上の高齢者 14 名に閉じこもり予防プログラムを実施した結果、生活習慣の認識が前後で有意に向上した。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study was to develop a home visiting program for elderly to prevent being homebound. It indicated by the survey research that a meaning of occupation was strongly relation to HRQOL of elderly than being homebound, in other words, homebound was not always a problem of health. Utilizing this result, intervention in clinic was performed to 14 subjects who were over sixty-five years old. The result showed that occupational competence regarding habituation was significantly positive increasing than initial assessment.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1, 400, 000	420, 000	1, 820, 000
2011 年度	600, 000	180, 000	780, 000
2012 年度	900, 000	270, 000	1, 170, 000
年度			
年度			
総計	2, 900, 000	870, 000	3, 770, 000

研究分野：応用健康科学

科研費の分科・細目：ヘルスプロモーション

キーワード：閉じこもり，介護予防，作業療法，作業

1. 研究開始当初の背景

高齢者の閉じこもりは、孤独死や高齢者

自身の要介護化につながるため、2006 年度の改正介護保険法により支援対象となった¹⁾。閉じこもりとは、介護保険法によると外出頻度が週に 1 回未満の状態をさし、65 歳以上の

高齢者のうち 10～15%が閉じこもりといわれている。介護保険では、特にハイリスクと判断された特定高齢者に介護予防プログラムを行っているが、閉じこもりの予防と支援には、閉じこもり高齢者に特化したプログラムがなく、閉じこもり高齢者への効果的な介護予防プログラム開発が急務であった。

申請者は、福島県南会津郡只見町保健福祉課の協力を受けて、閉じこもりとなった高齢者の 1 日の活動と活動に対する意味づけの特徴(=個人因子)を先行研究として実施していた(石橋, 2011a)。その結果、閉じこもり高齢者は毎日の活動に対する価値や興味が低く、休息と感じる活動時間が長いことが明らかとなった。また、1 年後の閉じこもり高齢者の介護保険利用状況の調査により、作業への意味づけが低い高齢者ほど要介護者となっていたことが明らかとなった(石橋, 2011b)。そこで申請者は、作業の意味づけに注目し、閉じこもり解消を目的とした支援プログラムを只見町の高齢者 1 名に実施した⁵⁾。このプログラムは、対象者の 1 日の活動を評価し、高齢者が問題と感じた活動に対して高齢者自身がどのように取り組むことができるのか、問題に対する対処法(コーピングスキル)を作業の中で教授するものであった。その結果、訪問回数は 2 回であったにも関わらず、事例は友人との交流や外出の機会が増えるなど、閉じこもりは解消し、1 日の作業に対する価値や興味も向上した。一方、本研究では、作業の意味づけ、外出行動の関係性については検討しておらず、意味づけが改善したことが良かったのか、外出したことが良かったのか検討することは課題であった。

以上の背景より、閉じこもり高齢者へのプログラム開発を実施するにあたり、高齢者の外出行動、日常生活の作業の意味、健康関連 QOL の関係性をはじめに明らかにし、プログラムの焦点を検討する必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、以下の 2 部構成で実施したので、目的をそれぞれに述べる。

(1) 高齢者の外出行動、日常生活の作業の意味づけ、健康関連 QOL の関係性

高齢者の閉じこもりに関する報告において、高齢者が毎日何を行い、その活動をどのように感じているのか(活動への主観的認識)に注目した論文は少な井野が現状であった。研究 1 の目的は、健康高齢者を外出行動と活動の主観的認識から 4 群に分類し、各群の QOL の特徴を検討することである。

(2) 地域在住高齢者に対する、支援プログラムの

効果検証

研究 1 により、高齢者への支援は、閉じこもり支援だけでなく、現在の生活に価値観を見出すための支援も必要であることが明らかとなった。このように、作業療法士による閉じこもり予防・支援は、単に外出を支援するだけでなく、対象者の作業の問題に優先的に取り組む必要性があると考えられ、それを実証することが課題であった。そこで研究 2 の目的は、閉じこもり予防を目的とする化粧(=日常生活上の作業)を通じた健康教室を、東京都大田区の 65 歳以上の高齢者 14 名を対象に実施した。

3. 研究の方法

(1) 研究 1

本研究は、東京都荒川区都市計画課と協力して、2011 年 1 月 22 日から 2 月 15 日までの約 3 週間にわたり郵送調査を行った。東京都荒川区では、バリアフリー基本構想のもとに 4 つの重点地区を設定し、生活環境整備を進めている。本研究は、住民基本台帳をもとに、重点地区の 1 つの A 地区に在住する 65 歳以上の全高齢者 5,135 名を対象に実施した。アンケート用紙には、回答はできる限り対象者本人が書くことや、記入が困難な時は第 3 者の代筆でも構わないことを明記した。また、入院中、入所中、長期不在、転出、死亡その他の理由で回答できない場合は、該当する選択肢に印をつけて返送してもらった。アンケートは性、年齢、疾患・障害の有無、介護保険利用の有無、外出頻度の他に、QOL を SF-8、活動の主観的認識を作業に関する自己評価改訂第 2 版(OSA)を聞いた。OSA は 21 項目の質問で、遂行状況に関する認識を 4 件法で選択してもらい得点化した。外出頻度は 1 週間に 1 回未満を閉じこもりとした。

分析は、はじめに返信者から介護保険利用者や死亡者などを除外した。分析対象者は、外出頻度により、非閉じこもり群と閉じこもり群の 2 群に分類した。また、OSA の得点を変数に非階層性クラスター分析を実施し、「活動問題あり群」と「活動問題なし群」にさらに分類した。その結果、対象者は 4 群(A 群：非閉じこもり・活動問題なし群、B 群：非閉じこもり・活動問題あり群、C 群：閉じこもり・活動問題なし群、D 群：閉じこもり・活動問題あり群)の 4 群に分類された。4 群間の QOL は分散分析で比較し、その後 Tukey 法で検定した(危険率 5%)。本研究は、首都大学東京安全倫理委員会の承認を得て実施された。

(2) 研究 2

研究デザインは、1 群を対象とした群内前後比較とした。平成 24 年 11 月 2 日より平成 25 年 2 月 15 日までの 4 ヶ月間に、合計 8 回

のプログラムを実施した。対象は、東京都 A 区に在住する 65 歳以上の高齢者 14 名(年齢中央値 78 歳)である。対象者の募集は、地域包括支援センターおよび老人会を通して実施した。募集広告には、「お化粧品から健康づくりをはじめませんか?」というキャッチフレーズを記載した。プログラムは全 8 階実施した。第 1 回から第 6 回までは、化粧(=日常生活上の作業)を通して日常生活を振り返る講義とメイクを実際に行う演習で構成されており、講義には人間作業モデル(MOHO)の概念の一部取り入れた。

本研究の成果指標には、健康関連 QOL (SF-8)、WHOQOL26、作業に関する自己評価 (OSA) を使用し、Wilcoxon の符号付順位和検定を実施した(有意確率 5%未満, SPSS ver. 18.0)。なお、本研究は、東京工科大学倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

(1) 研究 1 の結果および考察

【結果】1991 名から回答があり、回収率は 38.7%で、分析対象者は 1317 名であった。各群の内訳は、非閉じこもり群 1117 名(A 群 983 名、B 群 134 名)、閉じこもり群 200 名(C 群 162 名、D 群 38 名)であった。4 群比較の結果、SF-8 の 8 項目全てにおいて有意差が認められた。各群の比較の結果、QOL の得点は A 群、C 群、B 群、D 群の順に高く、有意差が認められた。

【考察】

本研究の結果、C 群の方が B 群よりも QOL が有意に高かった。したがって、高齢者が高い QOL を維持するためには、外出の維持も重要ではあるが、高齢者にとって生活上必要な活動が問題なく行えることの方がより重要ではないかと思われた。

【結論】作業療法は対象者の活動遂行の問題に焦点をあてるため、B 群と D 群がより作業療法の必要性が高いことが示唆された。結果より作業療法の必要性を検討できたため、外出行動と活動への主観的認識で分類を用いて、各群への支援内容や優先性を検討できるのではないかと思われた。

(2) 研究 2 の結果および考察

【結果】

プログラム初回には 14 名の高齢者が参加し、年齢中央値は 78 歳であった。参加者 6 名は健康教室の参加経験があり、8 名は健康教室の参加経験がなかった。参加者 11 名は化粧品を所有していたが、3 名は化粧品を所持していなかった。プログラムへの参加率が 70%(6/8 回)を超えた参加者は 13 名であった。

成果指標の前後比較を実施した結果、OSA の習慣化の得点が有意に向上した($P < 0.05$)。

また、WHOQOL26 の社会的関係の得点に向上する傾向があった($p = 0.10$)。一方、その他の得点に関して有意差は認められなかった。

【考察】

本研究では、健康関連 QOL には有意差が認められず、OSA の習慣化と WHOQOL26 の社会的関係で有意差もしくは有意な傾向が認められた。本プログラムでは人間作業モデルの概念を取り入れている。人間作業モデルとは、人がどのように動機づけられ、生活を習慣化し、それを環境の中で遂行しているのかを説明するための理論である。本プログラムの目的は、化粧(=日常生活上の作業)に動機づけられ健康教室に参加した高齢者の生活習慣の振り返りと再発見であった。したがって、本研究の成果は当初の目的を達成する結果であったと考えられる。

【結語】

健康日本 21 によると、健康寿命の延伸、早世の予防、QOL の向上が重要とされている。高齢者が望むライフスタイルを長く維持し QOL の向上を図ることは、健康寿命の延伸と同等に医療福祉専門職が取り組むべき重要な課題である。しかし、介護予防事業には健康寿命の延伸を主目的としたプログラムはあるが、QOL の向上を主目的としたプログラムは見あたらないのが現状であった。本研究とこれまでの知見より、本プログラムは健康寿命の延伸と QOL の向上に寄与する可能性があることが示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

1) Yu Ishibashi, Takashi Yamada, Norikazu, Kobayashi, Mime Hashimoto, Kirsty Forsyth: The relationship between homebound status, occupational competence, and its Effects on HRQOL. Hong Kong Journal of Occupational Therapy, (in press), 2013. (査読あり, IF=0.353)

2) 石橋裕: 高齢者の閉じこもりと作業療法。作業行動研究 16, 50-52, 2012. (査読あり)

[学会発表] (計 6 件)

1) 石橋裕, 山田孝, 橋本美芽, 小林法一, 長野博一: 閉じこもり高齢者の「生きる目的」に関する研究 - 荒川区における作業に関する自己評価改訂第 2 版(OSAII) を用いた大規模調査から。日本作業療法学会抄録集 46, 2012. 6. 15-17. 宮崎市

- 2) 石橋裕, 山田孝, 小林法一, 石井良和:地域支援事業開始後の高齢者の閉じこもり研究動向に関する文献研究. 作業行動研究 16, 149, 2012. 9. 15-16. 名古屋市
- 3) 石橋裕, 山田孝, 橋本美芽, 小林法一:外出行動と活動への主観的認識で分類した高齢者の QOL の特徴. 第 71 回日本公衆衛生学会総会抄録集, 351, 2012. 10. 24-26, 山口市
- 4) Y. Ishibashi, T. Yamada, M. Hashimoto, H. Nagano, N. Kobayashi: The characteristics of the competence and value regarding daily occupation among the housebound elderly - The survey of Arakawa-city Tokyo metropolitan-. Ninth Asia/Oceania Regional Congress of Gerontology and Geriatrics 2011, 2011. 10. 24-26. Melbourne, Australia
- 5) Y. Ishibashi, T. Yamada, M. Hashimoto, H. Nagano, N. Kobayashi: 27 The influence of housebound upon the occupational adaptation among elderly; using the OSA: 5th Asian Pacific Occupational Therapy Conference. 2011. 11. 21-24. Chiang Mai, Thailand
- 6) 14) 橋本美芽・石橋裕・長野博一: 都市部在住高齢者の外出特性と外出を支援する都市環境に関する考察, 日本保健科学学会誌, 14 (Suppl.), p. 17 (0-05), 第 21 回日本保健科学学会学術集会, 2011. 10. 15. 東京都

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石橋 裕 (YU ISHIBASHI)
首都大学東京・人間健康科学研究科・助教
研究者番号: 50458585

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号:

